ヴァルター・ベンヤミンのクラウス論における「全人間的なもの」の概念

Der Begriff der ‚Allmenschlichkeit‘ in Walter Benjamins Kraus-Essay

内村博信

UCHIMURA Hironobu

【要旨】 第一次世界大戦後のドイツでは、表現主義者や行動主義者のあいだで「全人間」ということばが、同胞愛や博愛主義を表明する概念としてしばしばもちいられている。ヴァルター・ベンヤミンは批評作品『カール・クラウス』で「全人間的なもの」を、敗戦から一九二〇年代の経済復興をへて、ふたたび世界恐慌の経済的混乱を迎える錯綜した時代を象徴する概念として提示すると同時に、表現主義の文芸批評家クラウスの〈批判Ⅱ批評〉の実践を特徴づける概念として議論を展開するのである。

ベンヤミンは、一九二九年頃から「批判Ⅱ批評」の使命というタイトルで一連のメモを残しているが、そのなかで戦後文学の状況を戦争文学と表現主義という二つの観点から論じることを計画している。実際に一九二〇年代後半、「フランクフルト新聞」や「文学世界」に発表された諸々の批評作品では、第一次世界大戦とその敗戦から一九二〇年代の復興と経済的混乱をへて、国民社会主義が台頭していく不穏な時代状況のなか、これら二つの文学的潮流を担う政治的ロマン主義・「保守革命」のイデオログたちと、表現主義者・行動主義者たちの展開する議論について論じられている。一方で、政治的ロマン主義・「保守革命」のイデオログたちが犠牲と救済の観念と技術主義のイデオロギーを、他方で、表現主義者・行動主義者たちが敗戦による「罪Ⅱ負債の意識」と神秘的な平和主義のイデオロギーを主張するのにたいして、ベンヤミンは政治的ロマン主義・「保守革命」が唱える英雄主義や「指導者精神」と、

表現主義・行動主義が唱える「全人間的 allmenschlichなもの」という概念とのあいだに通底する精神性を認め、そこに混乱する時代状況を反映する思潮を読みとろうとするのである¹。以下では、後者、すなわち表現主義・行動主義にたいするベンヤミンの議論について検討したい。

1

ベンヤミンは、一九二〇年代に「フランクフルト新聞」や「文学世界」に発表した諸々の批評作品のなかで、第一次世界大戦から一九二〇年代初頭にかけて時代を支配した表現主義、行動主義の時代批判的な言説や政治的姿勢、なによりその似非平和主義や左翼急進主義的な精神主義を「革命的な基盤のない革命的身振りの擬態 Mimiky」にすぎないと批判しつつ²、他方、カンディンスキー、ク

レー、シエーアバルトなどの表現主義者、なかでもカール・クラウスについては、「革命的身振りの擬態」をその論争術の逆説的な特徴とする批評活動を高く評価している。

ベンヤミンは表現主義の運動について、「革命的な基盤のない革命的身振りの擬態」にすぎない、と述べているが、たとえば「平和商品」(一九二五年、二六年五月「文学世界」に掲載)で、ドイツ表現主義の劇作家フリッツ・フォン・ウンルールの『ニーケーの翼ある旅の本』(一九二五年)³を、そうした擬態の典型として批判している。ウンルールは、プロイセン貴族の出身で、第一次世界大戦へのドイツの参戦を愛国主義者として熱狂的に支持し槍騎兵として出征するが、前線の悲惨な戦場を目の当たりにし、またみずからも負傷したことで、戦後は平和主義者として活動することになる。ベンヤミンがまずなにより問題にするのは、「戦争で指揮をとり、しかも平和の祭典で音頭とりをしようとする者」⁴によって唱えられた平和であるという点、戦争を引き起こした人物が戦争については何も語らず、自分は平和を愛していると強調する点である。平和を欲する者はむしろ戦争について語るべきであり、これからやってくるであろう戦争について、そうした戦争を引き起こしそうな人物や要因について、その戦争の恐るべき手段について語るべきなのだが、ウンルールは仰々しくいかかわしい文体で専制政治と闘う英雄的な勇者のごとく振る舞い、ナルシズム的な「虚栄心」から平和主義を唱えるだけである。それは開戦当時、新聞に発表した、「祖国のために、そしてドイツの血のために」戦うことを唱えた「騎兵の歌」に描かれた自分の転倒した姿にすぎない。ベンヤミンはさらにウンルールのこの平和主義を、みずからの『暴力批判論』のなかの法と正義の議

論にもとづいて批判する。ヨーロッパがこれまで依拠してきたカントの平和論は、「倫理的な理念」と「法の理念」の誤って想定された一致にもとづいて展開されてきたが、これらの一致が十九世紀のヘーゲル的な「精神」へと解消していくなかで、ドイツの平和の観念は神秘主義的な性格を帯びるようになった。それにたいして、そもそも西ヨーロッパの民主主義の平和思想は「世俗的、政治的、法的に代替可能なもの」にもとづいていて、仲裁裁判所および条約を基盤とする「平和」⁵講和こそが国際法の理想であり、したがって、「無制約的で武装した平和の法」と「平和的な正義なるもの」との倫理的な「抗争」こそを問題にするべきなのだが、ウンルールはこうした実情を理解することなく、ドイツの神秘主義的な平和の観念を振りかざすばかりで、平和主義をたんなる平和の祝宴に還元しようとしている、というのである。

さらにベンヤミンは書評「行動主義の誤謬—クルト・ヒラーのエッセイ集『明るみのなかへの跳躍』(一九三二年)で、クルト・ヒラーのジャーナリズムにおける活動を、戦争の防止や死刑廃止への取り組み、左翼統一戦線の形成といった点においては評価しつつも、ヒラーが唱える「精神の支配」⁶、「精神労働者の支配権」に関するテーゼは誤りであると批判する。ヒラーはこれらのスローガンを、一九一八年にみずから主導する「精神労働者評議会」⁷においてはじめて表明したのだが、これらのスローガンが要求する「ある種の指導」⁸、「行動主義の信条表明」に問題があるという。ベンヤミンは、「精神労働者の支配権」にたいして異議を唱えるつもりはないとしつつも、ヒラーのサークルに認められる「支配」のイメージが、零落したブルジョア階級がいかに全盛期の理想から離れられないかを

暴露するような類のものでしかない論じるのである。政治において決定的なのは、精神労働者たちが展開する「私的な思考」などではなく、ブレヒトのことばでいえば「他の人々の頭のなかで考える術」⁹にほかならない。十月革命における多くの知識人による新政権にたいするサボターージュに認められるように、精神労働者というこの特別なタイプの人間」たちは、結局、自分たちを清算することである。権力の手中に帰するような方向でしか活動することしかできない。「人間相互の人間らしい関係の表現」こそが「創造的なもの」、「生産的なもの」のだが、そうした表現はいまや「共同体の生」のなかで死に絶え、もはや「私人」という「エンブレム」のなかに物象化されるにとどまっている。こうした「私人たちの無定形な群衆」をたとえば精神労働者の議会において先頭に立たせてみたところで愚かなことにすぎない。むしろ、精神労働者が「私人たちの無定形な群衆」の病理的な障害をとりのぞき、彼らにその社会的な機能を付与していくことこそが重要ではないか、というのである。¹⁰ベンヤミンはさらに『生産者としての作者』（一九三四年）で、ヒラーの「精神的人間」がひとつの立場を代表する「ある特定の性格的類型の代表者」にすぎず、「ある特定の職業部門に属する者」ではない点に、「この集団形成の原理そのものが反動的なものにとどまり、この「集団の影響」が革命的にはなりえない要因を認め批判するのである。¹²

他方、ベンヤミンはカール・クラウドスの文芸批評にも表現主義の特徴である「革命的身振りの擬態」を認めつつ、しかし同時にその独特な論争術に表現主義の最良の成果を見だし、肯定的に評価している。ベンヤミンのクラウド論『カール・クラウドス』（一九三二年）は、「全人間 Allmensch」、「デーモン」、「非人間 Unmensch」の三章

から構成されているが、ベンヤミンはまず「全人間」をこの時代を象徴する概念としてとらえている。

「全人間」ということばは、一九一五年に発行されたクラウドスの雑誌『炬火』¹¹にドストエフスキーの『作家の日記』のなかの「ユダヤ人問題」の翻訳が掲載されるが、この翻訳のなかに登場する。ドストエフスキーは、ある教養あるユダヤ人から、あなたは民族としてのユダヤ人を憎悪し攻撃している、という内容の投書を受けとり、その女性にたいしてロシア人にはユダヤ人にたいする宗教的憎悪はないと釈明しつつ、ユダヤ人にもロシア人にたいしてもつと寛大で公正であること——ドストエフスキーのこの点に関する議論は反ユダヤ主義的な固定観念に溢れている——を要求し、諸民族の完全な精神的な団結が生まれることを期待する、と返答している。¹³さらにそのような団結を生みだすためのひとつの例として、ある若いユダヤ人女性がプロテスタントのあるドイツ人老医師の葬儀について報告した投書を紹介する。その投書は、老医師がユダヤ人のほか、ロシア人、ドイツ人、ポーランド人、リトアニア人など多数の民族の住むある小都市でだれにたいしても分け隔てなく献身的に医療を施したすえ亡くなり、プロテスタント牧師とユダヤ教のラビに祝福され葬儀が執り行われた出来事について報告しているのだが、ドストエフスキーはこの医師を「全人間 Allmensch (öblicher Mensch)」¹⁴と呼び、この出来事に問題の解決の糸口があると主張するのである。¹⁴

一九〇六年から一九一九年にかけて、ドイツでドストエフスキーの最初の全集が出版され、「ユダヤ人問題」は『政治論集』の巻に収められる。¹⁵スラブ人の母親をもちドストエフスキーやゴーゴリの翻訳者でもあった評論家ルドルフ・カスナーは、『エッセイ集』

(一九三三年)で「全人間」とニーチェの「超人」を、それぞれ東洋的な人間像と西洋的な人間像の根底にあるものとして対比的に論じ、東洋的な人間像の調和的な側面を強調しているが、さらにフランク・ヴェルフェル、クルト・ヒラー、ローベルト・シヨイなどの表現主義や行動主義の作家たちによって、この当時、「全人間」はドストエフスキーがもちいたことばとしてしばしばとりあげられている。¹⁷ マックス・シェーラーもまた、『知識形態と社会』(一九二六年)のなかで、ヨーロッパが「物質」から「魂」へと、アジアが「魂」から「物質」へと、それぞれ異なった傾向をしめしつつ人間にとって可能な知識の課題に取り組んできたと論じ、いまや新たに「全人間の総体的知識の発展」に取り組むべき段階に達していると、この文化的総合に到達してはじめて「存在可能な全人間的なもの」が誕生しうるのだと主張している。¹⁸ またシェーラーは一九二七年十一月五日にベルリンで行った講演「調和の世代における人間」で、やはりニーチェの「超人」と対比しつつ来たるべき理想の人間像として「全人間」に言及している。講演では、第一次世界大戦をつうじて人類ははじめて全体的な体験をしたのであり、そこから人類の共通の歴史がはじまったのだとし、人類はさまざまな力の「調和」均衡 *Ausgleich* をつうじて「全人間性」へと接近していかなければならないと論じているのである。¹⁹

表現主義、行動主義の作家たちやシェーラーが「全人間」を、彼らの主張する「すべての人類に共通するもの」、「同胞愛」を表現する概念として言及するの²⁰にたいして、ベンヤミン、さらにクラウスは、「全人間」をこの時代を象徴する逆説的な概念としてとらえている。クラウス自身も、戯曲『文学あるいはお手並み拝見』(一九二一

年)の第一幕の最後で、二人の「狂乱女」が二つのタイプの理想の男について議論を戦わせるなかで「全人間的」ということばをもちいている。²¹ 第一の狂乱女がクラウスのような秘教的でアポロ的なタイプの男を理想像だとするの²²にたいして、第二の狂乱女はウンルーのような表現主義のディオニュソス的な「行動主義者」^{アクトヴィズニスト}を理想像だとし、そこに「来たるべき全人間」の「宗教創設者の創造的な炎」を認めるのである。²² クラウスもまたベンヤミンと同様に、しばしばウンルーの、第一次世界大戦中は戦意高揚的な文章を書きながら、戦後は平和主義者として振舞うその姿を、「ウンルー」と題された寸評を書き、朗読会で朗読することで皮肉っているが、「全人間」はうわべだけで同胞愛や平和主義を唱える表現主義者や行動主義者を諷刺するためにもちいられるのである。²³ さらにベンヤミンもまた、「ドイツ・ファシズムの理論」(一九三〇年)のなかで、ユンガーが第一次世界大戦におけるドイツの敗戦について「敗戦こそがドイツ性のために要求される」と主張するの²⁴にたいして、ドイツ・ファシズムの理論の根源は「ヒステリックに全人間的なものにまで高められた罪」負債の告白にあるとし、「全人間的なもの」を全人類を包括する観念としてもちいつつ、そこに「敗北を内的な勝利へと倒錯的に転倒する企て」を、「戦争の崇拜、神格化」の「症候」を認め批判するのである。²⁴

ベンヤミンがクラウス論の最初の章「全人間」でまずテーゼとして叙述するのは、たとえばレーオポルト・リーグラが『カール・クラウスとその作品』(一九一九年)のなかで「倫理的な人格」、「調和的に完成されたタイプの人間」として、また他のクラウスの信奉者が「博愛主義者」として証明しようとしているが、²⁵ 彼らが論争家ク

クラウドに見いだす「全人間性」の、まさにこうした「症候」としての倒錯的な性格にほかならない。ベンヤミンはクラウドのそうした「全人間性」を構成する要因を、彼の論争術における、「神学的な尺度」にもとづく「如才なさ」²⁵ 妥当なものにたいする感覚に認め、シュティフター、さらにヨーハン・ペーター・ヘーベルの「如才なさ」²⁶ 妥当なものにたいする感覚」と比較し論じている。

「神学的な尺度」にもとづく「如才なさ」²⁶ 妥当なものにたいする感覚」とは、世間一般に認められた慣習とは異なり、さまざまな状況のなかで臨機応変に振舞う才能をいうのではなく、反対に「社会的な状況」をそのまま「自然の状況」として、それぞれか「楽園の状況」として対応することのできる能力なのだ²⁶。ベンヤミンは、そうした能力の背景にはクラウドの抱いている「被造物」の概念があり、その概念とは十七世紀に全ヨーロッパ的にアクチュアルな妥当性をもっていた「思弁という神学的遺産」を受け継ぎ、「オーストリア的世俗性の全人間的信条」へと変貌をとげたものなのだ²⁶と説明する。そしてこの信条にもっとも適切な形を与えてみせたのがシュティフターであり、クラウドが動物や植物や子供たちを話題にするときにはこの信条が反響しているのを聞きとることができるという。ベンヤミンはクラウド論で、シュティフターの『石さまさま』（二八五三年）の序文について言及しつつ、自然と人倫の世界がカントの倫理法則とは異なり、その核心においてあくまで「被造物の世界」にかかわっていると述べているが、そもそも『石さまさま』の序文は、フリードリヒ・ヘッベルがシュティフターは「小さなもの」²⁷ ばかりに目を向け、人間を叙述することを忘れていると批判したのにたいする反論として書かれたものにほかならない。シュティ

フターはまたそれ以前に、友人宛の書簡（一八四七年八月二十一日）で、詩人に必要なのは「客観的な人間性を神の摂理の反映 *Widerschein des göttlichen Willens* として叙述すること」であり、ヘッベルには「偉大な形象、鮮烈な思想、悲劇的な閃光」が認められるが、それらを「神の摂理の反映」として調和させるものが欠けていると批判している²⁸。さらに三月革命直後の友人宛の書簡（一八四八年五月二十五日）で、たとえ自由をもとめるばあいであれ暴力に訴えることは事態を混乱させるだけであり、「節度と自由をそなえた人間」たる²⁹ことが、「法則」²⁹掟への尊重から服従すること」が必要だと説いている。ベンヤミンが述べている十七世紀ヨーロッパの「思弁」という観念を受け継いだ「全人間的信条」とは、まさに「人間性」を自然のなかに「神の摂理の反映」として見いだそうとする信条、「神の摂理の反映」を自然の「法則」²⁹掟のうち²⁹に認識しようとする信条であると理解することができる。ベンヤミンはそうした信条のもとに振舞う能力に、「社会的な状況」を「楽園の状況」として対応するシュティフターの「如才なさ」²⁶ 妥当なものにたいする感覚」を認めるのである。

ベンヤミンはしばしば、シュティフターがこの「神の摂理の反映」を自然の「法則」²⁹掟に還元してしまう点を問題にしているが、クラウド論のなかでもシュティフターの『石さまさま』の序文について、「神聖なものは暗黙のうちに、法則という控えめではあるがいがわしい概念に席を譲ってしまった³⁰」と批判し、それ³⁰にたいしてヨーハン・ペーター・ヘーベルやクラウドをそうしたいかがわしい神秘主義に陥ることのない正しい感覚をもっていたとして対比的に論じている。

ベンヤミンは『ヨーハン・ペーター・ヘーベルⅢ』（一九二九年）のなかで、シュティフターが嵐や地震などの大きな現象よりも、小川の流れや穀物の生長などの小さな現象にこそ偉大な普遍性があると主張するのにたいして、ヘーベルが些細な日常的な物語を描きながら、「大きなものと小さなものにたいする正しい感覚」をそなえ、ささやかなものの神秘主義に陥らなかつたのは、神学の修練によるものだと、つぎのように説明している。ヘーベルの作品は、「教化的」であり、その作品がしめす世界の広さ、精神の広さは啓蒙主義とフランス革命にある。ベンヤミンは、そこにフランス革命の時代の精神に震撼されながら南ドイツの小都市の住民でありつづけたヘーベルの作品の核心があり、「社会主義者」の精神につうじるものがあると評価する。啓蒙主義とフランス革命は理念としてではなく、世界市民的、啓蒙主義的な思想をもったカトリック聖職者、浮浪者、博愛家といった人物類型と、彼をとりまくさまざまな状況との連関として作品のなかに現われてくるのだが、神学者の「態度」と世界市民の「態度」がそこでは浸透しあつて登場することがヘーベルの作品の「比類ない具体性の秘密」なのだ³¹。ヘーベルの作品では、市民の職業生活に潜む「魔神的なもの」がさまざまな犯罪の物語として繰り広げられ、「教訓＝道德 Moral」が忍耐、賢さ、人間性として叙述され、その作品は商人という堅実な小市民階級にたいする教化という役割を担っている³²。「倫理」はこうして「如才なさ＝妥当なものにたいする感覚」の問題として、「美德」は「格率」にしたがつた行為によつてではなく、「沈着さ＝当意即妙 Geistesgegenwart」によつてしめされる。つまり普遍的な格率が隠されている行為ではなく、市民社会の具体的な状況のなかに人目に

つかぬままに内包されている「沈着な＝当意即妙な」行為こそが「道德的」なのであり、したがつてヘーベルの「教訓＝道德」は「状況 Situation」と結びついていて、具体的な状況のなかではじめて発見されるものだ、というのである。

さらにベンヤミンによるなら、ヘーベルがこの「如才なさ＝妥当なものにたいする感覚」を「説教者の態度」のうちに具えているとすれば、クラウスは「鎧のうちに秘めている」のだ³⁴という。「ヨーハン・ペーター・ヘーベルにあつては、〈如才なさ＝妥当なものにたいする感覚〉の構成的で創造的な側面が最高度に展開されるとすれば、クラウスのばあいには、〈如才なさ＝妥当なものにたいする感覚〉の破壊的で批判的な側面が最高度に展開される³⁵」。ベンヤミンはここで「全人間クラウス」ということばをもちいて、シュティフターによつて無価値なものとした雷雨や稲妻、嵐や地震を、「全人間クラウス」はふたたび神の創造の手へと、しかも「人間という冒瀆的な存在にたいする、創造の側からの最後の審判の解答」として取り戻すのだと論じる。この「全人間クラウス」ということばには、敗戦を内的な勝利へと転倒することで戦争を神格化するユンガーの「全人間的」な「罪＝負債の告白」と同様に、「全人間」という概念の担う倒錯的な「症候」としての性格が反映されている。というのも、シュティフターにとつてオーストリアの風景が散文の「喜ばしい広がり」と重なりあつているとすれば、クラウスはそこに六十の新聞のために日々五万本の木々が切り倒される風景を、地獄の風景を重ね合わせるのだが、クラウスの信奉者たちが認めるクラウスの「全人間性」とは、まさにこの風景と結びついているからである。クラウスにとつて被造物と

は、シュティフターと同様に、「創造を映す真なる徳の鏡」であり、そこには失われた時代の彼方から、すなわち樂園から「誠実、純粹、感謝といった美德」が映しだされるのだが、クラウドがそこで見いだす「被造物」の特徴は、「生みだすもの」が「破壊するもの」によって代わられてしまっている点、創造と破壊が交錯しあっている点に、したがって「全人間性」はけっして純粹なものになりえない点にある。³⁷クラウドにとって創造と最後の審判との間の隔たりは「救済史の成就の過程」でも、「歴史的な克服の過程」でもなく、人類は技術をつうじた被造物との戦いにおいてかならず敗北するときだめられている。³⁸ベンヤミンは、歴史とはクラウドにとって人間を神の創造から分け隔てる荒野にすぎないと、クラウドの作品『人類最後の日々』を念頭におきつつ、「この創造の最後の式典が、世界戦争である」と論じているのである。³⁹

したがって、クラウドの論争術は「全人間的」な逆説性のもとに展開される。その特徴はベンヤミンによるなら、ジャーナリストたちのようにことばを知識で充足させるのではなく、ことばを予感で責め苛むように憎悪や軽蔑や悪意のもとにとらえる点にある。⁴⁰つまり、「聖書のパトスを、ヴィーンの生活の猥雑さを執拗に凝視するまなざしと交差させること」⁴¹にこそ、この時代のさまざまな現象へと接近するときのクラウドの論争術の特徴があり、「聖書のパトス」にもとづくその「沈着さ」⁴²「当意即妙」が目ざすのは、状況を解体し、その状況のなかに含まれている真の問題提起を発見し、この疑問を相手に突きつける点にある。

クラウドは一八九九年にヴィーンで雑誌『炬火』^{フアッケル}を創刊し、一九一一年以降、一九三六年の彼の死に至るまで独力で発行しつづ

け、彼の作品のほとんどすべてをこの雑誌に発表している。『炬火』^{フアッケル}におけるクラウドの論争術は、もっぱらジャーナリズムの多用する「常套句」^{フラーゼ}に向けられる。たとえばクラウドは、第一次世界大戦勃発期に、当時の作家やジャーナリズムのあいだで戦意高揚の「常套句」^{フラーゼ}となっていた「大いなる時代」ということばを揶揄する反戦エッセイ「この大いなる時代に」⁴²（一九一四年）を書いているが、クラウドはそこで「報道を生みだす行為」と「行為を惹き起こす報道」との関係を暴くことをつうじて「常套句」の担う権力のあり方を問うている。ベンヤミンはこのエッセイに言及しつつ、「常套句」^{フラーゼ}とはジャーナリズムが「事物への支配権」をふるうさいの「専横さ」⁴³「恣意 Willkür の言語的表現」⁴³であると同時に、技術の産物であり、「思想を流通可能なものにする商標」⁴⁴であると説明している。すなわちベンヤミンは「常套句」^{フラーゼ}が高度資本主義社会において担う権力の扇動的で波及的な側面を問題にするのだが、クラウドの論争術の特徴を「事物の剥き出しの存在」⁴⁵に、すなわち事件、日付、目撃者に執拗に着目し、法律、言語、政治にかかわる事実を精確に叙述することをつうじて「常套句」^{フラーゼ}が担う権力を暴いてみせる点に認めるのである。⁴⁵

2

『炬火』^{フアッケル}は当初、唯美主義的な性格をもっていたが、一九三〇年以降、政治的な方向性を担うことになる。ベンヤミンはそこで、まづ「常套句」^{フラーゼ}にたいするクラウドの唯美主義的な〈批判〉⁴⁶〈批評〉⁴⁶の特徴を分析し、そこからクラウドの政治的な〈批判〉⁴⁶〈批評〉⁴⁶に内

在する問題について検討している。

建築家アードルフ・ロースが「装飾と犯罪」（一九〇八年）で実用品と芸術作品を区別し、実用品である建築に装飾をほどこすことを犯罪だと告発するのと同様に、クラウスもまた情報と芸術作品を区別し、ロースが装飾家にたいして闘いを挑んだように、ジャーナリズムと文学との境界を覆い隠す詩と散文からなる文芸欄を、それが芸術作品を市場での情報の流通に奉仕するための装飾品へと貶めたがゆえに批判し、さらにその創始者であるハイネを告発する。⁴⁷ ベンヤミンは、そうした「無定見なジャーナリスト」の化けの皮を剥ぐこそが、新聞界にたいするクラウスの戦いの始まりだったと述べ、ジャーナリズムにたいするクラウスの論争術を、「文士および娼婦という存在形式の完全な対応関係」、「剥き出しの精神というしるしのもとにある生」と「剥き出しの性というしるしのもとにある生」との対応関係、「連帯関係」をつうじて説明するのである。⁴⁸ クラウスはジャーナリズムの問題を、なにより精神と性が遭遇するところ、姦通や売春などの当時の猥褻罪の訴訟をあつかうジャーナリズムのあり方に見いだす。⁴⁹ そこで問題となっているのは、「正義にたいする法の反逆の罪＝負債」であり、「概念の存在 Dasein」の基盤をなしていることばにたいする概念の反逆の罪＝負債」なのだという。ベンヤミンは、「あるはつきりとした目的があつて、個人的な不道徳 Unsitlichkeit を普遍的な不道徳の問題へと発展させたものが、猥褻罪の訴訟 Sitichkeitsprozess なのだ」という一文をクラウスのエッセイ「子供好き」（一九〇五年）から引用しているが、姦通や売春が性を直接、交換の対象とするがゆえに「剥き出しの性」というしるしのもとにある生」という性格をもつのにたいして、

ジャーナリズムがこうした性の猥褻罪の訴訟を問題にすることとばを市場へと流通させる行為を「剥き出しの精神というしるしのもとにある生」と性格づけ、クラウスのジャーナリズムへの批判を説明するのである。つまり、それは道徳の問題を法の問題へと還元するだけでなく、猥褻罪の訴訟をあつかうことでことばを商品として売るジャーナリズムの問題でもあるというのである。ベンヤミンは、「剥き出しの性」と「二義的」な連帯関係を結ぶジャーナリズムの「剥き出しの精神」を「魔神的なもの」と呼ぶ。他方、ベンヤミンはクラウス論の草稿のなかで、「精神と性の二義的な交錯」は、「だれもが性の対象——ことばと女——の代わりに他の対象で満足するように」、クラウスの活動を一貫して規定する根拠なのだとし、猥褻罪の訴訟を批判するクラウスにも同様に「魔神的」な側面が潜在していることを問題にする。⁵¹ クラウスの論争術の根底には、「自慰」がファンタジーをつうじて性を充足させるように、その論争術が「事物の剥き出しの存在」に固執することで精神を満足させるという、「魔神的」な側面が潜在している。すなわちクラウスは、「剥き出しの性」、猥褻罪の訴訟をあつかうジャーナリズムの「剥き出しの精神」の化けの皮を剥がして見せるのだが、クラウスのその唯美主義的な論争術には、同時に、「自慰」的に空虚な幻想に憑かれて充足する「自我」がつきまとっているというのである。

クラウスにとつて、そもそも売春は「自然的な形式」であつて女性の性を社会的に損なうものではない。他方ベンヤミンは、売春が性の交わりと金銭のやりとりとを交錯させるといふ性格をもつ点を問題にし、この「二重の自然性としてのこの二重の本性」、「二義性」が売春を「魔神的」ものにしてしていると説明する。「新聞を攻撃する

ばあいも、売春を擁護するばあいも、クラウドにとって社会学的な領域がけつして透明なものとならないのは、このように彼が自然に囚われていることに関連している。彼にとって人間にふさわしいものとは、解放された——革命的に変化した——自然を規定し実現することとしてではなく、自然そのもののエレメントとして、つまり、分節されていない原存在 *Ursein* のうちにある、歴史をもたぬ太古の自然のエレメントとして現われているもののだが、このことはさらに、自由と人間性について彼が抱いている理念にも、不明確で無気味な反照を投げ返している⁵²。したがって、クラウドの論争術には自由と人間性の理念における「魔神的」な、「反動的」な契機があり、まさにそこにジャーナリズムを批判するさいの不十分さがある。ベンヤミンは草稿で、クラウドが新聞の腐敗の「社会的基盤」、「今日の階級国家における売春の機能」を認識していないと、つまり売春がまさにこの時代の階級的な諸関係のなかにみずからの「自然的な存在」を生産しているがゆえに疎外されていることを見誤っていると指摘し、クラウドの論争術の特徴をつぎのように説明している。「なぜなら、クラウドにとつて純粋な精神と純粋な性は彼の実存の領域であるかぎり、完全に同一のものであり、魔神的なものの中にあり、それゆえに彼は純粋な精神と純粋な性をその構造にしたがつて見落とすということが生じうる。しかしこのことは、この領域の内部で展開され、この領域を超えでることはないが、たえず分裂し、それらを否認し、それらを粉碎する彼の弁証法的な活動と表裏一体にあるのだ⁵³。つまりクラウドの唯美主義的な〈批判〉批評は、とりわけ性をめぐる議論に認められるように、社会的腐敗を暴くという破壊的な活動となつて現われてくるのだが、同時に

そうした腐敗が生じてくる社会的基盤を問題にすることができないという点に、その逆説的な性格があるというのである。

他方、ベンヤミンは「常套句」にたいする批判の政治的な方向性を、クラウドが憎悪をなげかける「世論」公衆の意見 *Öffentliche Meinung* をめぐる議論に認め、つぎのように説明する。そもそも「公衆 *Öffentlichkeit*」の「利害関心」は「判決」をつうじて獲得されるべきものであり、「裁く公衆」でなければ公衆の名に値しないはずである。それにならして、「意見 *Meinung*」とはあくまで私的なものであり、「商品流通」に同化させうる「偽りの主観性」という性格をもつ。新聞界が「常套句」をつうじてつくりだす「世論」は、「公衆」を流通可能な「意見」へと同化させることで「事実 *Sache*」から遠ざけ、「公衆」から「事実」を覆い隠すことで「裁く能力」を奪い、責任能力をも奪つてしまう。「炬火」は、こうした世論にたいする「判決 *Richtspruch*」の宣告を、さらにそうした世論をつくりだす新聞界にたいする判決の宣告を迫っているというのである⁵⁵。だが、ベンヤミンはそれゆえに、クラウドの論争術が「人格的」個人にかかわる *persönlich* 批判」と「事実についての *sachlich* 批判」を一体化することをつうじてなされる点を問題にする。クラウドは、この区別が論争の評判を貶め、現代の文学的状况、政治的状况を腐敗させていると主張するのだが、ベンヤミンは「人格的」個人にかかわることから」と「事実にかかわることから」とを一体化したものと批判する点、書物を手掛かりとするよりも「人格」をつまみ、彼らは何を書いたかよりも、彼らは何者であるのかを抛り所にするという点にクラウドの論争術の特徴があり、それがクラウドの論争術の「権威 *Autorität*」をも形成していると説明するのであ

る。⁵⁷ それゆえにクラウスは、「人格」から遊離し流通しうるような「意見」を代表することがないし、代表することができない。⁵⁸ つまり、「世論＝公衆の意見」にはかならずなんらかのいかがわしさがつきまとうとしても、それなしには政治的な社会変革を可能にする言論も形成しえないのだが、そうした「世論＝公衆の意見」のいかがわしさを強調するあまり、個別的な事実や私的な立場を超えた議論を形成することができないことに、クラウスの論争術の問題があるといるのである。

ベンヤミンは、クラウスのそのような無際限の権威をしるしづけているのは、「立法権と執行権との合一」であると、そしてこの合一がもつとも緊密なものになっているのが「言語論」であり、それゆえに「言語論」はクラウスの「権威」をもつとも決定的に表現するものであると主張する。クラウスは「この大いなる時代に」のなかで、新聞は「行為とは遂行されるよりもさきにまず報道されるもの」という外見をいつも生じさせる」と述べているが、クラウスの論争術の特徴はこの言語と行為との「無気味な一致」を強調し、そのいかがわしさを暴いて見せる点にある。だが、この一致は同時に、クラウスの論争術の根底にある言語論の「権威」を形成しているものでもある。そうした「権威」は、バロック論では「専制君主の決断力のなさ＝優柔不断 Entschlußunfähigkeit」と関連づけられ、また暴力批判論では「法措定的暴力」と「法維持的暴力」とを「亡霊的 gespenstisch」に混合させた警察権力のいかがわしさとして問題にされていた。ベンヤミンは、「客観的」な新聞、「党派的でない報道伝達」といったものはありえないことを強調し、つぎのように論じる。新聞は「権力のひとつの道具」であり、とりわけ高度資本主義

社会では新聞が何を支持しているかという目的だけでなく、どのように支持しているかという手段においても、つまり市場における流通過程においても、新聞は権力を表現する。したがって、「人格にかかわることがら」と「事実にかかわることがら」を区別せず「全人格」において、その「権威」において論争するクラウスの姿勢を賞賛し、高度資本主義社会を克服するべく「樂園の全人間性」を新たに回復することを目指しても、さらなる空虚な「亡霊的」な権力に奉仕することになるだけである。それゆえに、クラウスの信奉者たちがその師の活動のなかで讃える「純粹な精神」なるものは幻影であり、「虚栄心」こそがその論争術が形成する「権威」の本質だといっているのである。「彼の論争術は、かねてより、もつとも進歩した手段をもつてなされる暴露の技術と、太古の術策を駆使する自己表現の技術との、最高度に緊密な組み合わせはかならない。しかし、またこの領域においても、二義性をつうじてデーモンの姿が露わになる。つまり、自己を表現することと他人の仮面を剥ぐこととで互いに交錯し合って、ついに自己の仮面を剥ぐことになるのだ」。⁶² つまり、クラウスの暴露の技術としての論争術は、同時に自己表現としてみずからの権威をしめすことになるのだが、その権威は「虚栄心」にすぎないことがしめされると、クラウスの文体を支える力とは、「彼がみずから心のうちに思っている自己のイメージ」、つまり「虚栄心」だということである。クラウスの論争術が形成する「権威」には、「屈服させた敵」のなかに自己を反映させるといふ倒錯的な性格がつきままとつていている。ベンヤミンはこの倒錯的な性格を「魔神的なもの」と呼び、とりわけ「虚栄心」こそがクラウスの「魔神的」な本質の表現にはかならないと論じているのである。

暴露の技術と自己表現の技術を交錯させるクラウドの論争術は、「魔神的」な「虚栄心」につきまとわれ、その精神はけっして純粋なものとはなりえない。しかし同時にベンヤミンはまた、自己を表現することをつうじて論争相手の仮面を剥ぐその論争術の「擬態」の「身振り」に、表現主義者クラウドの文芸批評の決定的な意義を認める。クラウド論の草稿では、つぎのように記されている。「クラウドの文芸批評の本質的な構成要素は表現主義のものであり、それは一方で彼自身の魔神的な憑依＝熱狂の、他方で真正な Echtheit にたいする彼の感わされることのない感覚の所産なのである」⁶⁵。つまり、論争相手のどんな態度をも見逃さない「擬態」の「身振り」、「俳優的＝身振りのなもの das Mimische」、その「魔神的な多重人格性」をつうじて、「紛いもの＝真正でないもの das Unechte の化けの皮を剥ぐこと＝剥き出しにすること」が、クラウドの文芸批評の本質だというのが、ベンヤミンはそこに、この時代の保守主義とロマン主義が主張する英雄主義や指導者原理と秘教的な技術崇拜に對抗する、また表現主義や行動主義の主張する平和主義や博愛主義に通底する「全人間的なもの」という概念をその内部から批判する、〈批判＝批評〉の理論と実践を見いだすのである。⁶⁴

1 表現主義、行動主義の芸術運動は、一九一〇年に創刊された「シュトゥルム」誌や一九一一年に創刊された「アクツイオン」誌などの雑誌を中心に展開されている。「シュトゥルム」誌の創刊号ではカール・クラウドが巻頭エッセイ「オペレッタ」を書き、さらにアドルフ・ロース、エルゼ・ラスカー＝シューラー、アルフレート・デーブリーンなどが執筆協力者として参加している。また当時の急進左派思想を代表する雑誌と見なされた

「アクツイオン」誌は、フランツ・フェムファートが編集者兼発行者をつとめ、ゲオルク・ハイム、クルト・ヒラー、ハインリヒ・マンなどが同誌に寄稿している。ベンヤミンの引用は、著作については Walter Benjamin: Gesammelte Schriften, Frankfurt a.M. 1972ff. (ローマ数字による巻数、ページ数で示す。) また翻訳の該当箇所は、『ベンヤミン・コレクシオン』から、以下のように略記し、巻数、ページ数を記す。『コレクシオン』: 『ベンヤミン・コレクシオン』全七巻、浅井健二郎責任編集、筑摩書房、一九九五年—二〇一四年。

2 Vgl. Benjamin, GS VI 175.
 3 Urruh, Fritz von: Flügel der Nike. Sämtliche Werke Bd.7. Berlin 1979. ウンルーはその後、一九三一年には社会党の準軍事組織「鉄の戦線」とともに、ナチス党と保守・右派政党によって組織されたハルツブルグ戦線に對抗するが成功せず、翌年三二年に亡命している。
 4 Benjamin, Friedensware, GS III 25. (『コレクシオン』第四巻、五二六頁)
 5 Vgl. ebd., GS III 24. (同書、五二五頁、参照)
 6 Vgl. Benjamin, Der Irrtum des Aktivismus. Zu Kurt Hiller Essaybuch, Der Sprung ins Helle, GS III 350. (同書、六一七頁、参照)
 7 Vgl. ebd., GS III 351. (同書、六一八頁、参照)
 8 Vgl. ebd., GS III 351. (同書、六一九頁、参照)
 9 Vgl. ebd., GS III 352. (同書、六二〇頁、参照)
 10 Vgl. ebd., GS III 352. (同書、六二〇頁、参照)
 11 Vgl. ebd., GS III 352. (同書、六二〇—一頁、参照)
 12 Vgl. Der Autor als Produzent – Anspruch im Institut zum Studium des Faschismus in Paris am 27. April 1934, GS II 690. (『コレクシオン』第五巻、三九八—九頁、参照)
 13 Vgl. Kraus, Karl: Die Judenfrage. Von F. M. Dostojewski. (1877) Die Fackel. Nr.413-417. Wien Dezember 1915, S.49ff. フォイヨートル・ニハイロヴィツチ・ミストエフスキー『ミストエフスキー全集』第十八巻『作家の日記II』新潮社、一九八〇年、三五五—三三三頁、参照 (Ф.М. Достоевский: дневник писателя. полное собрание сочинений в тридцати томах. Т. 25. 1983, С. 74-88.)
 14 Vgl. ebd., S.69ff. 「ユダヤ人問題」では、「全体的人間 общечеловек」、「共通の人間 обще человек」ということばが使われている。ドストエフスキー、前掲書、三七三—三八〇頁、参照 (Ф.М. Достоевский: дневник писателя. полное собрание сочинений в тридцати томах. Т. 25. 1983, 88c, 92c.)。この

- やはり『作家の日記』のなかの『ブーシキン論』では、「ロシア人の使命は『真のロシア人』、『完全なロシア人』になることであり、それは『全世界的』な、すべての人びとの『同胞』になること、「全人 всечеловек」になることだと主張されている。『ドストエフスキー全集』第一九卷『作家の日記Ⅲ』、新潮社、一九八〇年、三四四頁参照（Ф.М. Достоевский: дневник писателя. полное собрание сочинений в тридцати томах. Т. 26. 1984, 147c.）。
- 15 Vgl. Dostojewski, F.M.: Gesamtausgabe. Piper Verlag, München 1906-1919. クラウスは『ユダヤ人問題』を掲載した翌年の『炬火』にドストエフスキーの全集の紹介をしている。Vgl. Kraus, Karl: Notizen. Die Fackel. Nr.418-422. Wien März 1916, S.47f.
- 16 Kasserer, Rudolf: Gogol, in: Essays Leipzig 1923, S.27ff.
- 17 たとえばヴェルフェルはヒラー宛の公開書簡で、党派的な行動に訴えるヒラーのような行動主義者にたいして、ドストエフスキーの「全人間についてあの有名な手紙」をもう一度読むようにうながしている。Vgl. Werfel, Franz: Die christliche Sendung. Offener Brief an Kurt Hiller. Tätiger Geist! München 1918, S.221; Scheu, Robert: Das Wahrheitsamt. Das Tage-Buch Heft 21 Jahrg. 1 Berlin 1920, S.704; Hiller, Kurt: Brauchen wir eine Reichswehr. Das Tage-Buch. Heft 29 Jahrg. 3 Berlin 1922, S.1022; Kraus, Otto: Flaubert und Dostojewski. Die Weissen Blätter. Nr7. März 1914, S.670.
- 18 Vgl. Scheier, Max: Die Wissensformen und die Gesellschaft, Bern 1960, S.146. (マックス・シェーラー『シェーラー著作集』第十一卷、浜井修他訳、白水社、一九七八年、二一七―一八頁、参照)
- 19 Vgl. Scheier, Max: Der Mensch im Weltalter des Ausgleichs, in: Philosophische Weltanschauung. Bonn 1929, S.55f. (マックス・シェーラー『シェーラー著作集』第十三卷、亀井裕他訳、白水社、一九七七年、一七五―一八七頁、参照)
- 20 たぶん、ピントウスが編纂した『人類の薄明』の「序」を参照。Vgl. Pithus, Kurt: Zuvor, in: Theorie des Expressionismus. Stuttgart 1998, S.80f.
- 21 Kraus, Karl: Literatur oder man wird doch da sein, in: Werke von Karl Kraus. Hrg. v. Heinrich Fischer. Bd. 14, München/Wien 1967, S.7ff. そもそもクラウスのこの戯曲は、ヴェルフェルがクラウスを風刺する戯曲『鏡人』(一九二〇年)を発表したことに応酬するかたちで書かれたものであり、戯曲では、ヴェルフェルをモデルにした主人公ヨハン・ヴォルフガングが、文学界で成功を収めるべく父や「無定見なジャーナリスト」とともにさまざまな策略を練る姿が描かれている。
- 22 Vgl. ebd., S.30f.
- 23 Vgl. Kraus, Karl: Urnh. Die Fackel. Nr.679-685. Wien März 1925, S.11f. 実際にはウンルーは、「隣人愛を唱えるディレッタント die Dilettanten der Menschenliebe」と揶揄されている。
- 24 Benjamin, Theorien des deutschen Faschismus (1930), GS III 240f. (トイン・ファンズムの理論』『ロレクシオン』第四卷、五六九―七三頁)
- 25 Vgl. Benjamin, GS II 345. (『ロレクシオン』第二卷、五〇六頁、参照)
- 26 Vgl. ebd. GS II 339. (同書、四九五頁、参照)
- 27 ベッセルは、一八四九年の「ヨーロッパ」誌に掲載された『古い自然詩人たちと新しい自然詩人たち』という、シュナイフターなどの自然詩人を揶揄するエピソードを書いている。Vgl. Hebel, Friedrich: Die alten Naturdichter und die neuen. Friedrich Hebel's sämtliche Werke. Bd.8, Hamburg 1867, S.127.
- 28 Vgl. Stifter, Adalbert: Brief an Aurelius Buddens 21. August 1847, in: Adalbert Stifters Leben und Werk. In Briefen und Dokumenten. Frankfurt a.M. 1962, 186f. (『シュナイフター作品集』第四卷、高木久雄他訳、松籟社、一九八四年、一七五頁、参照)
- 29 Vgl. Stifter, Brief an Gustav Heckenast 25. Mai 1848, ebd., 200f. (同書、一九六一―七頁、参照)
- 30 Vgl. Benjamin, GS II 340. (『ロレクシオン』第二卷、四九七頁、参照)
- 31 Vgl. Benjamin, GS II 636. (『ロレクシオン』第四卷、八一頁、参照)
- 32 Vgl. ebd., GS II 639. (同書、八六頁、参照)
- 33 Vgl. ebd., GS II 640. (同書、八八頁、参照)
- 34 Vgl. Benjamin, GS II 339. (『ロレクシオン』第二卷、四九五頁、参照)
- 35 Ebd., GS II 339. (同書、四九四頁)
- 36 Vgl. ebd., GS II 341. (同書、四九八頁、参照)
- 37 Vgl. ebd., GS II 350. (同書、五一六頁、参照)
- 38 Vgl. ebd., GS II 340f. (同書、四九七頁、参照)
- 39 Ebd., GS II 341. (同書、四九八頁)
- 40 Vgl. ebd., GS II 353. (同書、五二二頁、参照)
- 41 Ebd., GS II 337. (同書、四九二頁)
- 42 Kraus, Karl: In dieser großen Zeit. Die Fackel. Nr. 404 Dezember 1914. Benjamin, GS II 335. (同書、四八八頁)
- 43 Ebd., GS II 343. (同書、五〇二頁)
- 44 Vgl. ebd., GS II 335. (同書、四八八頁、参照)
- 45 Vgl. Loos, Adolf: Ornament und Verbrechen, Wien 2012, S.94f. (アドルフ・

- ロース『裝飾と犯罪——建築・文化論集』伊藤哲夫訳、中央公論美術出版、二〇一一年、九〇—一〇四頁、参照)
- 47 Vgl. Benjamin, a.a.O., GS II 336. (前掲書、四八九頁、参照)
- 48 Vgl. ebd., GS II 352. (同書、五二二頁、参照)
- 49 Vgl. ebd., GS II 350. (同書、五一六頁、参照)
- 50 Vgl. ebd., GS II 350. (同書、五一六頁、参照) Kraus, Karl: Die Kinderfreunde. Die Fackel. Nr.187. Wien 8. November 1905, S.12.
- 51 Vgl. ebd., GS II 1099f.
- 52 Vgl. ebd., GS II 353f. (前掲書、五三—四頁、参照)
- 53 Vgl. ebd., GS II 1093.
- 54 Vgl. ebd., GS II 343. (同書、五〇二頁、参照)
- 55 Vgl. ebd., GS II 335. (同書、四八六—七頁、参照)
- 56 Vgl. ebd., GS II 342. (同書、五〇一頁、参照)
- 57 Vgl. ebd., GS II 343. (同書、五〇二頁、参照)
- 58 Vgl. ebd., GS II 343. (同書、五〇三頁、参照)
- 59 Vgl. ebd., GS II 344. (同書、五〇三頁、参照)
- 60 Vgl. ebd., GS II 344. (同書、五〇四頁、参照) Vgl. Kraus, In dieser großen Zeit, a.a.O., S8f.
- 61 Vgl. ebd., GS II 348. (同書、五二二頁、参照)
- 62 Vgl. ebd., GS II 345f. (同書、五〇七—八頁、参照)
- 63 Vgl. ebd., GS II 1101.
- 64 Vgl. ebd., GS II 347. (同書、五一一頁、参照)